



EFTER FLODEN

P.C.ヤシルド

洪水のあと

山下泰文訳

岩波書店



P.C.ヤシルド

洪水のあと

山下泰文訳————— 岩波書店

洪水のあと

一九八六年八月二四日 第一刷発行 ©

定価二〇〇〇円

訳者 山下泰文

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒104 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
電話 〇三二六五二二
振替 東京六三六四〇

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000801-3

目次

シナリオ I

..... 1

シナリオ II



..... 363

後記

P・C・ヤシルド 373

訳者解説

..... 375



シナリオ
I

「ディアーナ号」が外海から入ってくるとき、あとを追ってくるカモメは一羽もない。ディールエンジンゼルエンジンをチョーク限界ぎりぎりに絞り、帆をたたんで、楔形くさびをした湾の入口と覚しきところに向かって船を進める。キャプテンはいま完全にエンジンを切る。船が自分のたてた波に推されて傾きながら湾に滑り込んでいくとき、ディールディールの騒音のあとの静寂が、鈍く耳に鼓動する。湾内の水は波もなく、鉛のように重く横たわっている。空は朝から、あぶらぎった獣皮のような雲に覆われている。

帆走中の風がいまはなくなり、みんな汗ばみはじめている。露しやいだ、しかし強烈な灰色の光を避けるように、キャプテンが額に前腕を押しあてて、上体を操舵室から外に乗りだす。あとはおれたち五人のうち、三人が船首にいる。一人は海底を睨にらみながら、短い船首斜檣バウスプリットの上にべったり這いつくばり、あとの二人は用意よろしく鉤竿かぎざおを持ってつつ立っている。四人目の男はあけ放たれたエンジン室にいて、デッキすれすれにそろうじて鼻を突き出し、熱気のなかであえいでいる。おれはいえ、最後にキャプテンに命令されて、船尾の錨の係りだ。両手で舷縁ガンネルの鉄線ワイヤを握り、小舟が打ちつけてこないように片足を小舟の側に突き出し、弓なりにうしろにのけぞって横になっている。

この島に上陸を試みるのはこれで十一回目だ。エンジンを絞ってここに入っていくなんて、正気の沙汰ではない——でも、キャプテンにはこうするよりほかに仕様がなない。オイルタンクにはほんの少しのオイルしか残っていないのだ。最後の燃料を残しておかないと、ことによると二度と風のあるところには出て行かれないかもしれない。

速力が落ちて舵がきかなくなり、船がそのまま奥へと滑り込んでいくと、ゆっくり船首が向きを変えろ。軽い小舟の方が「ディアーナ号」を追い越し、湾の尖端めざしてうしろ向きに入っていくこともがく。おれは起き上がって大綱もろとも錨を持ち上げる。湾岸には黒い海藻の帯が三メートルの幅でまわりをふちどっている。その上に急勾配の、まったく何ひとつ生えていない砂丘がそそり立つ。北側の砂丘の頂きには、絶滅した恐竜の骨格の残骸のように、一群の岩柱ラウツが立っている。その岩柱の風下かみしには、ピンク色の砂のなかに風のつくった流線形の窪みくぼができていり。

「すべてオーケー！」と船首の見張人が叫ぶ。

きつと海底に見えるものは砂ばかりなのだろう。おれたちが一番恐れているのは、船体をぶつくり切り裂きかねないガラス質の砂州だ。冷氣が水を氷に変えるように、熱が砂を焼いてガラスに変えることだってある。

「さあ、錨だ！」

おれはできるだけ遠くへ、黒錆さびびた重い物体を投げる。柱がこわれるように跳ね上がる海水は灰色で、さながら砂利のようだ。緑の髭ひげをはやした大綱が伸び、海岸の裂けた草の葉のようにお辞儀をする。そいつをしつかり結んでから、みんなのいる船首フオックスル楼に向かう。おれがそばをすり抜けよう

とすると、機関士が意味ありげにやっと笑い、これ見よがしに天を仰ぐ。キャプテンから、武器のチェックをする前にまず腹ごしらえをしておけ、あとで一番手に上陸するやつを決めるぞ、とお達しが出る。当のキャプテンはといえば、自分の分の干物を操舵室に持って上がるや、双眼鏡と海図を取り出し、どっかとそこに腰を据える。おれたちは背を舷縁にもたせかけてうずくまり、くいしばった歯のあいだで堅い魚皮を引きちぎる。目を上げるやつは誰もいない。関心がありそうな、元氣そうな、あるいは勇ましそうな様子なんか、誰もしたがらない。それが理由で、上陸の一番手にされるのが嫌だからだ。

「あの岩柱だ」と操舵室からキャプテンが言う。「あの岩はだ、ここが昔から海岸であったことを物語っている。海図は例によって、あまりよく合っておらん。だがいいか、岩柱ってやつは、半日やそこらで生まれるような代物じゃない。こいつは知っておかにならんぞ。もうい岩とも石ともつかんものを山の堅い骨格から、ほんの数ミリずつ、海が削り取ってきたものなのだ。バルト氷河湖、ヨルジア海、アンシルス湖、リットリナ海……。たまたま起こる洪水では、岩柱なんかできるもんじゃない。よほどすごい洪水でもないかぎりな。いいか、お前たち、間違はなくここは元からあった海岸だ。だから、ここにながったって不思議はない。小舟の港とか漁村の跡、あるいは軍用基地の廃墟があったっておかしくはないぞ！」

腿に額を押しあてて、おれたちはキャプテンの楽観的な講義を聞いている。キャプテンはおれたちを待ちうける一切の恐ろしいことには一言も触れないし、地雷が仕掛けられたごみの山を登って上陸することの危険についてはなにも言わない。

例によってキャプテンは、自分が上陸の一番手になると言いだす。しかし、当然のことながら、おれたちがそんなことを許すわけがない。キャプテンがいなくて、この先どうやって生きていけるというのか？ キャプテンは生き残るための秘訣をしこたま心得ている。ところがおれたちときたら、各自たったひとつの特技しか持ち合わせちゃいない。エンジン、調理室、帆、ポンプ、トロール網といった具合に。だがキャプテンはひとりでその体系の全体に通じているんだから。でも単に有能な指導者というだけではない。それ以上の人なのだ。おれが「ディアーナ号」に乗りこむずっと前から、キャプテンは生きながらえるということのシンボル、お守りになっているのだ。

おれはというと、これっぽっちの取り柄もない。みんなはおれのことを見習水夫と呼ばずに、へかわいいお嬢ちゃんと呼ぶ。船に乗せてもらうために支払わねばならなかった代償は、キャプテンのかわいい愛人になることだった。だから、連中はおれを信用していない。だからといって、ひとりおれだけはキャプテンのご信頼が厚いかというと、さにあらずだ。たいていはひとりぼっちで、冷たくあしらわれている。

「よし投票でいこう！」とキャプテンが言う。ほかの連中はうわの空でフーンと言う。

「じゃ、若くて元気のいいエドヴィンはどうだ」と、キャプテンが続ける。するとはじめはみんなしぶしぶ従っていたくせに、おれの名前があがったとなると、今度はさかんにキャプテンを後押しして、機関士などは両手を上げさえる。

ここ数カ月、おれに触^{さわ}っていなかった船仲間たちがおれの背中をドンとたたたく。ケラケラ笑いや

がって、船一番の武器のひとつでソ連製の銃剣付き自動カービン銃を、まるでオナニーをするときのように銃身をさすりながら手渡ししてくれる。おまけに、キャプテンが自分の腕時計のひとつとフェルト張りの水筒まで貸してくれる。キャプテンはまた塩づけのサバ一匹と米一袋を持っていけと、押しつけようとする。しかし、おれは断わる——一時間か二時間ほどの短い偵察だというのに、どうしてこんなにたくさんの食糧を持っていかなくちゃならないんだ？ キャプテンは気まずそうにおれの膝（ひざ）をじっと見つめてつつ立っている。それから、デッキの下に降りていく。ほかの連中は、それとは裏腹に、気持が悪いほど快く手を貸しておれを小舟に降ろしてくれる。そしてすぐそばの水面に勇気づけの唾（つば）を二度ばかり吐きかけてくる。おれは二時間後には帰ってきていなければならぬ。二時間たっても現われなければ、連中が合図に照明弾を打ち上げる。その三十分後に連中は湾を離れることになる。ひとりの見習水夫の安全より五人の乗組員の安全が優先するのだ。

おれが舟を漕いで「ディアーナ号」から遠ざかるあいだ、連中は手をポケットのなかに、あるいはズボンの腰帯（ウエストバンド）の内側に差し込んでじっと見つめている。漕ぐのは好きじゃない。過去のこと（はなむか）が延縄（はなむか）のようにあとについてくるからだ。キャプテンの汗ばんだ顔が操舵室の薄暗がりのなかにちらっと見える。幸運を、とか、じゃまたあとで、というふうに手を上げるでもなく、ぼんやりとそこに立つって海岸を見つめている。もうおれが嫌いになっているのでは？ 以前は、いつも事が終ると優しく、お前が好きだよ、と耳打ちしてきたくせに。いまではもう、数カ月前のことになる。ここ数回はなにも言ってくれなかった。ひょっとすると、ただ酔っぱらいすぎていて、口がう

まくまわらなかつたから愛の言葉が言えなかつたのでは？　とにかくおれは酔っていた。酔っぱらいすぎていて、吐いたのをあとで酒のせいにできたほどだ。

もちろんキャプテンは好きだ。男としてではなく父親として。無器用で厳しい親父。口は優しいが躰は厳しい。古ぼけた軍用毛布のなかでの出来事はほとんどみんな忘れてしまいたい。噛まれ傷、抓られ傷、あのキャプテンの息づかい。そのうえあの忍び笑ひも、また、終ったあとで長々と話す感傷的な身の上話もだ。ありとあらゆる非行の数々、知識探求への長い闘い、死んだキャプテンの母親のこと、自分の気前のよさについての作り話。でも、父親と息子についてのキャプテンの話は別だ！　よく夢のなかでキャプテンはおれの本当の父親になって出てくる。キャプテンの子供だということとは決して船の上ではない立場ではない——が、血のつながりのない愛人よりはずっとましだ。親子関係なら、嫌でもキャプテンもおれに航海術を教えないわけにはいかないだろう。

（かわいなお嬢ちゃん）とみんなから呼ばれなくなったことは不吉な兆だ。二カ月ほど前からみんなはエドヴィンと言いはじめた。その後、そのエドヴィンがますます頻度を増してエドヴィン野郎になってきた。キャプテンの気持が冷えはじめたことに連中の方がおれよりすばやく感づいたのだ。

うしろを振り向き、海藻のなかを突っきるのなら、いまがフルスピードで舟を漕ぐ潮時、と読む。おれは必死にオールを漕ぐ、が、それでも途中で身動きがとれなくなる。オールを漕いでも水面をかすめるだけで、まるで陸上で水泳練習をしているようなものだ。何百匹というハエがヨードの悪臭を放つヘドロから飛び上がり、おれのまわりをぐるぐる飛びかう。不吉な前兆だ。前に聞いた話

では、本島の近くでは夏に無数のハエがわき、とうてい生活などできたものではないが、この島にはそのハエがいない。この島は長いあいだ水没していたので、ハエの卵が溺死してしまった、ということだった。でも、こいつはつまり、うそってわけだ。さあ、早く出なくては！ 驚いたことに、水は長靴の胴を越すほど深くはない。口と目にはハエがたからないようにしているが、鼻孔と耳はどうすることもできない。背中に武器を斜交^{はすかい}にかけ、大腿でぎぶぎぶ音をたてながら浜にあがる。海岸べりの砂丘に登るのは、さしずめ砂利採掘場の穴を登っていこうとするようなものだ。でも、斜めに登ればこの絶壁を登れないでもない。小さな土砂くずれが起き、砂がどさっとブーツのなかに流れこむ。転ばないように躰^{からだ}にかけていた武器をはずさなければならぬ。片方の肩にかつぎ、台尻を首にあてがう。手から銃身が滑り落ちそうになる。まったくもう、武器用のグリスだけは船にふんだんにあるんだから。バランスをとるため、左腕をしっかり伸ばしておかなければならないものだから、ハエがなにに邪魔されることもなく顔を這いずりまわる。

やっと海岸砂丘のてっぺんに辿りつくと、北から熱風が吹きつけてくる。背後の眼下には、依然として湾が風下にあつて、電流をかけられた金属板のようにパチパチ音をたてている。数歩、さらに陸地の奥へと足を踏み入れる。と、そこで砂が終り、地面は不毛の、でこぼこの岩石^{イサ}台地^ヤに変わる。くぼみには小さな砂溜^{すなだま}りがあり、二つ三つ、枯れたアシがわずかに立つ茂みがある。さらにもっと北に行くと、新たな砂利の丘と砂丘の尾根が、灰色のなかに黄色く、ピンク色のなかに灰色に、高く低く波打っている。

長靴のなかの砂をあけてから、おれは岩柱^{ラウツク}に登り、下の船の方に手を振る。キャプテンの姿しか

見えない。キャブテンは操舵室につっ立って、双眼鏡で反対側の海岸をのぞいている。彼のつるの頭が灰色真珠のように光っている。岩柱^{ラウク}に登ると風の勢いが強い。いま風はまた湾にも達し、ここかしこに土砂降りのように吹きつける。帆船^{カッター}が傾き、キラッキラッとキャブテンの頭が光る。おれは腕時計の下にくっついていた砂を振り落とす。半時間が経っていた。

降りるとき、上半身をなま暖かい岩に横たえてみる。岩柱にはおれがいない。それとも、かすかにヨードのにおいを感じられるか？ 緩慢な死のにおいが？ しかし、岩の一部黒ずんだ表面は汚染されていないらしく、金と銀の粉をふりかけたような地衣^{こけ}が輪状に生えている。このヨードのにおいは湾のまわりの海藻からきているにちがいない。おれは突風のなかに起き上がる——ハエの群れはこの風に蹴散らされ、海藻のなかの自分たちの基地へと引きあげていく。

岩柱に背をもたげて座り、ざらざらした長靴のなかの足をよじり、カービン銃についた砂をシャツでぬぐい取り、それから湾の尖端に向かって歩いていく。こちらの方が砂が堅い。でも、やはり色は白っぽい骨色かピンク色である。漏れたオイルで黒く変色している箇所はどこにも発見できない。棒か細いパイプでもあれば、地面を突き刺せるのに。この足の下にはなにが隠されているのだろう。ごつごつした岩床、それとも埋没した町？

湾の尖端の奥には、裸の岩板^{スラブ}の下にごく小さな細水^{きざれみず}が湧き流れ、十センチばかりの幅の砂の峡谷を作って海をめざして流れ落ちている。この細い流れに近づくと、砂の表層が崩れ、流れを塞^{ふさ}ぎとめそうになる。もっと奥の方へわざわざぐるっとまわって歩いていかざるをえない。おれはその泉の上に腹這いになる。水はなまぬるい、が、濁ってはいない。心持ち塩^{しよ}っぱい、が、油ではない。

口や鼻の穴についた砂を洗い落とす。ここが前からある海岸だとすると——それならどちらの方角に本来の海岸が、あの海図に載っている海岸があるのだろうか？ 南の方角に行くに従って砂丘は細くなり、その一番先端では鉤形をした砂嘴になり、その上でふたつの海流が合流している。キャプテンが双眼鏡で南の海岸を調査しているので、おれもその海岸をあたってみることにする。南のここには岩柱は一本もない、ただ微風のなかでわずかに砂けむりを上げている、美しくうねった砂丘の尾根が一本走っているだけだ。どんどん歩を進め、いまおれの真北に船体を浮かべ、対岸の小舟の姿が、そのために、隠れて見えなくなっている「ディアーナ号」ともう少しで同じ高さになるところまでやって来る。

なんと、突然、帆が張られている！ 下桁が揺れ動き、船尾の錨が引きあげられる。次に船首の錨が。まるで船の転覆を防ぐとでもしているかのように、みんながデッキの上を行ったり来たり、走りまわっている。帆ははためきをやめ、風をはらんで脹らむ。「ディアーナ号」は前方左に向きを変え、ぐっと深く沈んでぐりとまわり、船首を外海の方角に向ける。おれは滑ったり、踵で走ったりしながら海岸べりの砂丘を駆けおりる。

「オーイ!!!」

おれは空中に武器を振りまわす。帆船は帆装をきしませながら外海に向かっている。そして取り残された小舟が対岸の海藻帯のなかに見えてくる。おれには見えないどんな危険が「ディアーナ号」を脅かしているのだろうか？ 海岸をぐるりと見まわしても別に異状はない。

「キャプテン!!!」

もう誰の姿も見えなくなっている船に向かって叫ぶ。みんなはデッキの下に降りてしまったか、それとも操舵室につめているのだらう。ひざまずき、台尻を地面に突き刺し、続けざまに発砲する。銃が反動で跳ね返ってくる。船からはなんの反応もない。自動小銃の銃声をかき消すほど風は強くないはずだ。おれはぐるっとまわって小舟のところに行こうと思って、海藻と海岸砂丘のあいだの黒ずんだ堅い砂の上を走りだす。銃剣が尻を打つ。道は、まんなかで赤いジャム状になった茶色い海藻の山で行き止まりになる。半ば万歳をした手で銃を頭上にかまえて水のなかへ。水の急な抵抗にあつてよろよろとよろめく。立ち止まり、百八十度振り返って見ると、船が少し傾きかげんに外海めざして、滑るように進んでいるのが目に映る。おれは操舵室に狙いを定めて発砲する。弾丸は、波の上に誰かが一握りの砂利をばらまいたように、誰を傷つけるわけでもなく、船の航跡にばらばらと乱れ散る。

やつのことで小舟のところまで来ると、猛烈に北風が吹いている。「ディアーナ号」を追って漕ぎだそうものなら、対岸の浜に押しやられてしまうほど強い。対岸の方ではすでに船が南にコースを変え終えて、いまは悠然とあの鉤形の砂嘴に向かって、船尾を高々と持ち上げて帆走している。キャプテンは、こんなに簡単にこの小舟を犠牲にしてしまうほど、おれを捨てたがっていたのだろうか？ それとも、小舟を残していったということは、戻ってくるつもりがあるのだろうか？ おれは舟を裸の砂地に引きずりあげる。が、結わえておく物がない。それからもう一度、重い足どりで崩れやすい砂丘をよじ登っていく。今度はハエがまつ毛に止まるかわりに、砂けむりをあげてと

びこんでくる砂粒が口のなかでジャリジャリ音をたてる。頂上からは帆船が再び向きを変えて、いま真西に向かって進んでいるのが見える。気持のなかに希望が湧いてくる。なんのことはない、きっとあんなに烈しく突風が吹いたものだから、あの不安定な投錨地からあんなに出し抜けに逃げださねばならなかっただけのことだったのだろう。

横なぐりの雨の幕が西の海上に張りだしてきて、「ディアーナ号」が視界から消える。雨宿りの場所を探しに、おれは内陸に向かって歩きだす。黄ばんだアシが風のなかでざわめいている。砂溜りと砂溜りのあいだにはなにも生えてはいないが、まるで火事のあとのように、ところどころ黒ずんだ、平らで少少でこぼのある岩がある。その岩には浅い裂け目が縦横に走っている。そのほとんどに金属の削りくずのような細かい、堅い砂がつまっている。二、三の少し深い裂け目に錆色があったコケモモの小枝が数束へばりついている。一本の若木に去年の実が二個ついている。その実はひからびたコショウの粒のように、おれの手の中からころころと転がり、急にふっと吹き飛ばされてどこかに消える。さらに数十歩進む。と、そのとき、すんでのところで幅五、六メートルの細い谷に落ちそうになる。砂嵐のため谷間のあるのがほとんどわからなかったのだ。ほっと安心して、風のあたらないところに這いおり、再び思いきって口を開いてハアハアと息をする。

谷間は底に向かって広がっていて、一部大きな石塊でふさがっている。壁面は段々になっている。細かい砂雨が上の嵐から降りそそいでくる。ここは土とカビのにおいがする、が、岩壁面は汚染されていなく、雑色の地衣模様を見せている。またここには古くさい小便のにおいがする青緑のイラクサも生えている。小石をひとつかみして、鼻の下にもってくる。ヨードかな？ だとして